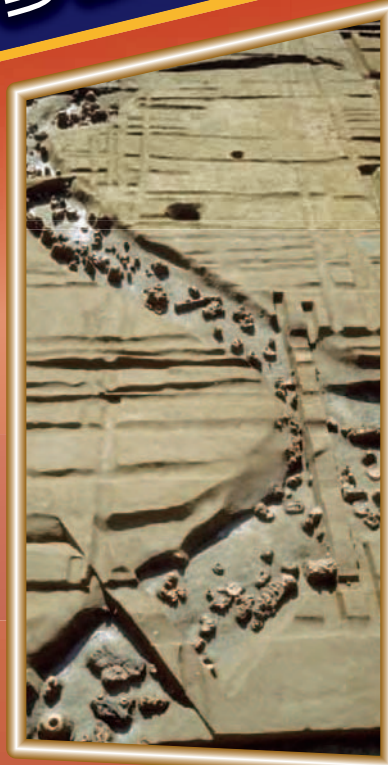


令和8年度夏季企画展

橿原神宮前駅ちかくの考古学



駅前考古学第2弾！！

2026.7.17 (Fri) → 10.12 (Mon)

はじめに

「橿原神宮前駅の改札口を出れば、そこには^{うねびやま}畝傍山が。」イコハクでは「駅前考古学」第2弾として、近鉄橿原神宮前駅（橿原市^{くめ}久米町所在）から徒歩圏内（以下、「^{かしちか}橿近」。橿原市^{きどの}畝傍町・^{えいわ}城殿町・^{いしかわ}栄和町・^{おお}石川町・^{おお}久米町・^{こじょうの}大軽町・^{いせき}五条野町）にある遺跡を紹介します。

橿近は、約3,000年前から栄えた地で、様々な時代の有名な遺跡があります。橿近に住んでいた人々は、^{じょうもん}縄文時代から日本各地とさかんに交流し、^{やよい}弥生時代には伝わった^{いなさく}稲作を導入しています。^{かんぱんとう}韓半島からもたらされた先進文化を取り入れた^{こふん}古墳時代を経て、^{あすか}飛鳥時代には「都会」へと変貌を遂げます。

畝傍山は、飛鳥時代の終末に^{ふじわらきゅう}藤原宮を守護する一角となります。畝傍山周辺は、飛鳥～奈良時代に^{へんさん}編纂された『^{にほんしよき}日本書紀』や『^{まんようしゅう}万葉集』には、^{じんむ}神武天皇の建国の伝承がある地として登場します。このように、橿近は歴史上の重要な場所として認識されていたことがうかがえます。

今回の展覧会では、名勝「大和三山」の一角である畝傍山が見守る橿近の歴史をご覧ください。

1. はじまりは畝傍山【縄文～弥生時代】

◆畝傍山と橿原遺跡

橿近で人々が暮らし始めたのは、縄文時代の終わり頃（約3,000年前）のことです。

畝傍山の東南麓で集落が営まれた橿原遺跡では、住居や墓、土器や石器などの暮らしの痕跡が見つかりました。土器には、東北地方を筆頭に、九州に至る日本各地の特徴を持つ土器が数多くあり、遠方との交流を知ることができます。エイやスズキなど様々な海水魚やクジラの骨まで出土し、橿原遺跡の人々の生活が海とつながっていたことまで分かります。橿原遺跡からは暮らしの道具だけでなく、祭祀に使われた土製品や石製品も多く出土します。中でも、土偶は西日本の縄文集落で最多の出土量です。

橿原遺跡には多くの人が集い、畝傍山は橿近のにぎわいとともにあつたのです。



橿原遺跡で使われた土偶たち
〔奈良県立橿原考古学研究所附属博物館蔵〕

◆稲作文化が来た

約2,600年前、稲作とともに新しい技術や文化が橿原の地にも到来しました。橿近の東側、現在は宅地や水田が広がる城殿町と栄和町の境目で行われた発掘調査では、川から水を引くための水路と、水田が見つかりました。水路は、地形に沿って東南から西北に掘られています。水路から近い水田は、水が広がりやすいため広く造られました。逆に、水が広がりにくい遠い水田ほど狭く造られました。調査地の周辺では、弥生時代終わり頃（1～2世紀）の水田が見つかり、この水田も同じ時代のものと考えられています。

水田に関わる施設は他にもあります。水田から約300m西南では、川の跡にしがらみが造られていました。しがらみは、水の流れをコントロールする目的で造られます。川の水を溝に導き、周辺の水田をうるおしていたと考えられます。橿近の東側は少なくとも、弥生時代後期には田園風景が広がっていたことが想定できます。



一辺8～10mの弥生時代の水田
〔藤原京跡下層〕

〈コラム〉「畝傍山と石庖丁」

畝傍山には、人々の暮らしを支える資源もありました。弥生時代に穂積具として使われた石庖丁の素材として、畝傍山と耳成山で採れる流紋岩が使われました。畝傍山周辺に点在する弥生時代初め頃（約2,600～2,300年前）に営まれた環濠集落の跡からは、流紋岩の原石や作りかけの石庖丁が出土しています。橿原では、畝傍山で採れる石材が、今日まで続く稲作の歴史のスタートをかざるものとなりました。そして、石庖丁の存在は、弥生時代初めから水田稲作が広く行われていたことを証明しています。



流紋岩製石庖丁〔14C-0719遺跡〕

◆弥生の集落

水田があったエリアの南側、栄和町周辺では弥生時代半ば～終わり頃（紀元前1世紀～1世紀）^{ほうけいしゅうこう ぼ}の方形周溝墓が見つかりました。方形周溝墓とは、土を盛って造った墓の周りを、四角形に掘った溝で囲ったものです。土が盛られた部分は破壊されてなくなっていますが、溝にはお供えに使った土器が残されていました。

なお、橿近では、当時の家や建物といった居住に直接関わるものは見つかっていませんが、ごみ捨て穴が見つっています。そのため、墓の近くに居住エリアがあったことが想定できます。

弥生時代には地形の高低差を利用して、①居住、②墓、③生産（水田）とエリアを分け集落を営むことが一般的だったと考えられています。橿近では、弥生時代の土地利用の一端と、時代による移り変わりの様子を知ることができるのです。



方形周溝墓を発見（黒い溝が周溝）
〔14C-0719遺跡〕

2. 人と物と情報【古墳時代】

◆各地から集まった土器

弥生時代にも集落があったと考えられる栄和町周辺では、古墳時代に入ってから^{けいぞく}も継続して集落が営まれた様子がうかがえます。水田が見つかった場所の南側では、古墳時代初め（4世紀）に利用された溝が見つかりました。溝は蛇行^{だこう}しており、集落を区画するのに利用されたと考えられます。この溝からは多量の土器が出土しています。出土した土器の中には北陸や東海といった他地域の特徴を持つものや、韓半島^{えんきやう}の影響を受けた可能性のある土器もありました。橿近には、遠隔地^{えんかくち}との交流で人と物とが集まっていたことがわかります。



蛇行する溝から多くの土器が出土
〔14C-0719遺跡〕

◆鉄器生産の痕跡

人や物が集まる橿近は、最新の情報も集まる場所でした。橿原神宮前駅のすぐ東南にある丈六南遺跡^{じょうろくみなみ}では、古墳時代半ば（5世紀）の、鉄器生産の痕跡が見つかりました。^{ふいご はぐち てっさい}鞆羽口や鉄滓などの鉄器生産に関わる遺物だけでなく、炉^ろの跡も見つっています。鉄器生産の技術は、渡来人^{とらいじん}が伝えた先進技術の一つです。丈六南遺跡で見つかった鉄器生産の痕跡は、渡来人がもたらした先進技術をいち早く取り入れた現場を目にすることができる、数少ない事例といえます。他にも、丈六南遺跡では、同じ時代の土器や玉類が出土しています。そのため、調査地のすぐ近くに集落があったと考えられ、先進技術を取り入れた人々が残したものの可能性がります。



炉の跡〔丈六南遺跡〕

古墳時代の奈良盆地各地では、他地域からもたらされたものが出土し、交流が活発だったことを示します。橿近も、交流のネットワークの中に入り、最新の情報を遅れることなく手にしていたのです。

4. 蘇我氏と葬送地【飛鳥時代】

◆飛鳥の有力者たちの墓

橿近の南の部分、丘陵地となる五条野町周辺は、古墳時代終わり頃～飛鳥時代（6～7世紀）にかけて多くの古墳が造られました。軽街から下ツ道を南下すると、奈良県最大、最後の前方後円墳である丸山古墳があります。丸山古墳は6世紀後半に造られ、全長約28mの最大の横穴式石室、2基の家形石棺を持ちます。諸説ありますが、蘇我稲目とその娘の堅塩媛の墓との見方が有力です。堅塩媛は欽明天皇の后で、推古天皇の母にあたります。

丸山古墳の東には、2つの横穴式石室が東西に並ぶ長方形墳である植山古墳があります。植山古墳の東石室には、熊本県産の石材を使った石棺、水晶製の三輪玉や歩揺付飾金具などの副葬品が納められていました。西石室には亀山石製の扉の痕跡が残ります。東石室は6世紀末頃、西石室は7世紀前半頃に造られ、他に類を見ない構造と副葬品を持ちます。植山古墳は、『日本書紀』推古天皇紀の内容から、推古天皇とその息子の竹田皇子の墓であるという説が有力です。



植山古墳（手前）と丸山古墳（奥）



三輪玉と歩揺付飾金具が出土〔植山古墳〕

◆今来双墓

植山古墳のさらに南東では2基の古墳、五条野宮ヶ原1・2号墳が見つかりました。墳丘や横穴式石室は破壊されていましたが、1号墳が一辺30m、2号墳が一辺25mの方墳と想定できます。横穴式石室は一部が残り、いずれも飛鳥時代後半（7世紀後半）の築造と考えられます。両古墳の横穴式石室は32m離れていますが、どちらも両袖式の横穴式石室で、床面の規模や広さはほぼ同じです。以上から、この2基の古墳は、同時期、同じ設計のもと造られた古墳であるといえます。

五条野宮ヶ原1・2号墳が築かれたのは、蘇我蝦夷と入鹿の最後の拠点である甘檜丘西南端の丘陵、南側の斜面です。この周辺は、『日本書紀』欽明天皇紀によれば、今来と呼ばれる地域の一部であったと見られます。



五条野宮ヶ原2号墳（左）と1号墳（右）

五条野宮ヶ原1・2号墳は、①今来にある、②飛鳥時代後半に築かれた、③同規模で同じ設計の古墳が並ぶということから、蘇我蝦夷と入鹿が造った「今来双墓」である可能性があります。

◆最古級の火葬墓

丸山古墳や植山古墳、五条野宮ヶ原1・2号墳があることから、五条野町周辺は蘇我氏に関わる人々の葬送地であった可能性があります。このエリアで見つかったのは、古墳だけではなく、植山古墳の東にある五条野内垣内遺跡では、飛鳥時代末（7世紀末）に遡る可能性がある火葬墓が見つっています。一辺約1mの方形で、深さ10cmの炭の中からは、火葬骨片と鉄板が出土しました。鉄板は、死者の経歴が書かれた「墓誌」とも、死者が墓を造る場所の土地神と交わした土地売買契約書「買地券」とも考えられます。

火葬墓に眠るのは誰か、鉄板は何だったのか、もはや死者のみが知ることですが、新しい葬送の形をいち早く取り入れ、文化的にも時代を先取りしていたことは確かです。



墓誌？買地券？鉄板〔五条野内垣内遺跡〕

おわりに

橿原の歴史の始まりを語るうえで、畝傍山の存在を欠かすことはできません。人々が抱いていた畝傍山に対する親しみの感情は、古代の文献にも表れています。『日本書紀』允恭天皇紀には、新羅の使いが畝傍山と耳成山をたたえたエピソードが載っています。また、平安時代に編纂された『延喜式』神名帳には「畝火山口神社」の名前が見られます。こうしたことから、畝傍山が古くから人々の心のよりどころであったことが分かります。展覧会でスポットを当てた橿近という場所は、畝傍山をめぐる信仰の地として、人々が集まる地となっていたことが考えられます。

多くの人が集まる橿近は、様々な地域とつながる道が整備され、新しい技術や文化、情報も伝わる地域の拠点となります。蘇我氏がおさえていた領域に橿近が含まれるのも、蘇我氏が橿近周辺を重要視していたことを裏付けます。蘇我氏の滅亡後は、藤原京の一角となり、京の南の玄関口となっていきます。

日本で最初の都城である藤原京ができた橿原は、日本という国が形づくられていくメインステージでした。そうした橿原の歴史の中で、橿近は大きな役割を果たした地です。それが神武天皇の「橿原宮」の伝承につながり、橿近はまさに「橿原」が始まった地と言えるのではないのでしょうか。

イコハククイズ

展覧会に名前が登場した天皇は何人いたかな？
数えてみてね。

■本書は、令和8年7月17日から令和8年10月12日まで開催する令和8年度夏季企画展「橿原神宮前駅ちかくの考古学」の展示解説パンフレットとして、作成しました。

■本展覧会は、杉山真由美が担当しました。

歴史に憩う橿原市博物館

令和8年度夏季企画展

「橿原神宮前駅ちかくの考古学」 展示解説パンフレット

編集・発行 橿原市魅力創造部文化財保存活用課
〒634-0826 奈良県橿原市川西町858-1

発行日 令和8年7月17日

印刷 株式会社明新社

〒630-8141 奈良市南京終町3丁目464番地